

息を呑む風景に出合ったことがある。と言っても何の変哲もない風景だったが……。もう三〇年も前の秋の京都府丹後半島のことだ。海岸部から山に分け入り、曲りくねった道を車で走っていると、ふいに山間に黄金色の稲穂が実った小さな田圃があらわれた。思わず車を止め、しばし風にそよぐ稲穂に眺め入った。これも三〇年も前のことだが、三陸沿岸の旅では、気仙沼湾や大船渡湾で、海面一杯にカキイカダやワカメ、コンブ養殖のプラスチックの浮玉が浮かぶ風景に出合った。青い海にイカダや浮玉が映えて、いつまで眺めていても飽きなかった。

「日本の自然に人の手が加わっていないものはない」と説いたのは、民俗学者宮本常一である。彼の持論は「風景は民衆が作り、作り上げられたもの」であり、「その風景こそが人の心を豊かにしてくれる」というものであった。実際、名所でもない丹後半島の山中の道端に私が思わず車を止めたのも、三陸の湾一面を彩る養殖風景に立ち止ったのも、人が作り出したそれらの風景のどこかに温もりや豊かさを感じたからであらう。

ダム建設により昭和六〇年に離村した新潟県の山間の集落、二面の栗の樹林も印象に残った。三面集落の

プロフィール
1945年大分県生まれ。漁業漁場研究者。日本の農山漁村を歩いた後、発展途上国の漁村振興計画調査に従事。周防大島(すおうおおしま)文化交流センター参与等も務めた。この間、宮本常一が主催した月刊誌『あるくみる ぎく』の執筆・編集をおこなうほか、『舟と港のある風景』(農文協)などの著作を発表。現在は同誌を地域別、テーマ別に再編集した『あるくみる ぎく 双書 宮本常一とあるいた昭和の日本』全25巻(農文協)の編纂に携わっている。



民衆が作りたる風景

もりもと たかし
森本 孝

川向かいの山麓に広がる栗林は、村人が長年かけて天然の森から雑木を引抜き栗林に作りかえてきたものだった。栗の木の下の雑草は、はじけて落ちた栗の実が草むらに紛れないように払われていた。天然と思われた栗林が実は村人が手を加えて作り上げた自然だったのである。

しかし最近の日本の山野は種々の理由でその荒廃が著しく目立つようになった。昭和三〇年、四〇年代には根菜類や雑穀、柑橘類が彩っていた瀬戸内の島々も、今は雑草や竹林に覆われつつある。そこには美しさも豊かさも感じられない。このままでは、日本人は自然と向き合う心や生き方、その技術を失ってしまうのではないか、少しばかり心配になる。福島から八戸までの東北日本の太平洋沿岸で実に多くの人命を奪い、人々の生産・生活の場であった沿岸を破壊した三・一一の大津波が、こうした風景の荒廃に拍車をかけることが懸念された。だが震災後の六月下旬に三陸を訪ねてみると、岩手県の山田町の海にはすでにカキ養殖のイカダが浮かび、宮古市重茂半島の浦でも海藻養殖の準備に勤しむ人々の姿があった。自然と向き合い生きてきた人々だからこそ、自然を作り出していく能力が秘められているのだと思えた。

月刊
みんぱく
2月号目次

- | | |
|--|--|
| <p>1 エッセイ 千文字
民衆が作りたる風景 森本 孝</p> <p>2 特集 座談会 東日本大震災を考える
出席者 川島 秀一
北原 糸子
林 勲男
中牧 弘允</p> <p>10 研究フォーラム
グローバルゼーションと南アジア芸能の実践者たち
松川 恭子</p> <p>12 みんなく Information
地球ミュージアム紀行</p> <p>14 レジスタンスたちの記憶を伝える
リヨン市立レジスタンス・強制移送史センター
福島 勲</p> <p>15 みんなく私の逸品
タッチカーピング(トキ)
広瀬 浩二郎</p> | <p>16 散策と思索の径
ネパール、シェルパの民家で仏画と出会う
小林 繁樹</p> <p>18 多文化をあきなう
Labo Love Japon ~厨房から愛をこめて~
松谷 治代</p> <p>20 歳時世相篇
春の到来
陳 天璽</p> <p>22 フィールドで考える
スワヒリ語をしゃべる人びと
鈴木 英明</p> <p>24 次号予告・編集後記</p> |
|--|--|